● イギリス――事例　活動状況と生活満足度

		A	B	C
基本属性	地域	地方	都市部	都市部
	性別	男性	女性	女性
	年齢	65	68	65
	暮らし方	妻と2人暮らし	夫と2人暮らし	夫と2人暮らし
	職業	救急医療サービス勤務	元金融機関勤務	元高校教員
Q1日常的に行っている活動	ある	○	○	○
	ない			
	① 形態	国営医療機関NHSの救急サービスの職員	① エイズ患者のデイセンターボランティア ② 民間非営利ホスピスボランティア	シェイクスピア劇場グローブ座でボランティア
	頻度	正規の職員でフルタイム勤務は不規則	週1回　数時間	春夏の劇場オープン時に10回ほど。1回につき数時間
	② 報酬	あり	なし	なし
	③ 時期	2011年1月から	① 15年前から　② 4年前から	2007年から
	④ 活動している理由	住宅ローン返済のため	誰かの役に立ちたいから	おもしろそうだったから
	⑤ 活動していない理由			
Q2家計	① 必要経費/月	30万円以上	20～30万円未満	10～20万円未満
	② 使途 生活維持	60%	50%	45%
	生活に潤い	5%	35%	20%
	予防・医療・介護	0%	0%	0%
	その他(税金・保険等)	35%	15%	35%
	わからない			
Q3財源	公的年金、企業年金、個人年金	30%	95%	90%
	賃金収入(本人と家族)	70%	0%	0%
	利子や配当、家賃収入	0%	5%	10%
	貯金の取り崩し	0%	0%	0%
	その他	0%	0%	0%
	わからない			
Q4	やりくりの状況	十分やりくりができ、黒字	十分やりくりができ、黒字	十分やりくりができ、黒字
Q5	収入増の使い道	生活に潤いを与える部分	生活に潤いを与える部分	生活に潤いを与える部分
Q6	暮らしの満足度	十分に満足している	ある程度満足している	ある程度満足している
	理由	経済的に余裕があり、行こうと思えば旅行にも行ける。また、物質的な欲望があまりないし、すでに所有しているもの、今ある状態に満足できるような考え方を持っている	借金もないし、好きなことができるから。ただ、サッカーと政治（労働党員として活動）に熱心な夫と話が合わないのが不満である	夫が毎日、暇さえあればパブ（午前中から開いている）に入り浸っているのが不満である

	D	E	F
	地方	地方	地方
	女性	男性	女性
	65	71	75
	独り暮らし	妻と2人暮らし	独り暮らし
	コンピューター関連会社勤務	元株式仲買人	元百貨店勤務
	○	○	
			○
	コンピュータ関連会社の研修主任	高齢者のデイセンターでボランティア	
	月曜日～木曜日の週4日	週2回、数時間	
	あり	なし	
	15年前から	2010年10月から	
	頼まれたから	誰かの役に立ちたいから	
			14歳から69歳までずっと働き続けたので、もう何にもしばられずに自由でいたい
	10 ～ 20万円未満	わからない	10 ～ 20万円未満
	50%	70%	70%
	10%	25%	15%
	0%	5%	0%
	40%	0%	15%
	0%	90%	100%
	100%	3%	0%
	0%	7%	0%
	0%	0%	0%
	0%	0%	0%
	十分やりくりができ、黒字	十分やりくりができ、黒字	プラスマイナスゼロ
	生活に潤いを与える部分	生活の維持のための基本支出 その他（他の家族への援助）	生活に潤いを与える部分 公的扶助を受けている姪とその別居中の娘2人に送金したい
	ある程度満足している	十分に満足している	ある程度満足している
	遠く離れて住む子どもたちの母親として、祖母として、盲目の母親の娘として、会社員として、というふうにいくつもの責任を抱えて体がいくつあっても足りない	今のところ家族や金銭的な心配がない	健康で、ほぼ毎日美術館などに外出しているし、家も所有しているし、あまり物欲もない。ただ、施設にいる妹やその姪など家族の心配がある。もう少し経済的に余裕があればいい

イギリス人の暮らしと満足度

矢部久美子　ジャーナリスト・在ロンドン

去る12月に発表された国立統計局のウェルビーイング報告書によると「76%の調査回答者が暮らし全般の満足度は70点（100点満点）またはそれ以上」と答えている。国の負債がかつてなく嵩み、緊縮財政が今後も何年も続くと予想されるこの国で、今のところ人々の満足度は意外にも高い。

1　お金に困らない、健康　そして絆と考え方

今回、ロンドンに住む60、70代の方たち6人に毎日の暮らし（社会活動や収入・支出）についてアンケートをした内容でも満足度は低くない。6人の回答者たちは現在または元の職業はいろいろだが、ほぼ健康で、仕事（A、D）やボランティア（B、C、E）、趣味の外出（F）にと活発である。1人（D）が都市の貧困問題のある区域に、他は比較的裕福で閑静な区域に住まう。4人は伴侶があり、女性2人は単身だが子どもや姪などとの絆が強くある。

お金はというと、恵まれたほうだ。多くの先進国で経済格差が進んでいるように英国でもそれに歯止めがかからず、高齢期もその例外ではない。国民年金（男65歳、女は60歳から漸次66歳に移行中）は単身で週に120ポンドそこそこだから、6人の毎月の支出だけでもそれらの2倍以上で、1,000ポンドから3,500ポンド。1人が何とかやりくりしているという他は、皆が十分やりくりできる、または黒字と答えている。その中の1人（元高校教員）は現実には夫婦で毎月2,000ポンドの収入がありながら半分の1,000ポンドしか支出していない。

支出のあり方は生活の潤いが5%から35%といろいろ。が、医療費などの項目はほぼ0%と共通だ。主に税で賄われて、入院も受診も無料の国営医療制度の恩恵がものをいうところだ。介護は原則本人負担なので、後期高齢期になってケアが必要になると事情は変わるだろう。そういう彼らの今の暮らしの満足度は、男性2人が「十分に満足している」、女性4人が「ある程度満足している」。その理由にはお金に特に困っていないというポイントがある。表にはないが、全員が持ち家で家賃を支払う必要もない。だから自由に活動できる健康と経済の余裕という前提があってのことではあるが、回答者たちの満足度の重要なファクターは、なによりも暮らし方、考え方そして伴侶やその他の家族、人とのつながり方にあるようだ。

2　ものに対する考え方

回答者のAさん、Fさんの2人は「物欲があまりない」ことを自分が暮らしに満足している理由説明の中に入れている。消費のスタイルがますます個人のアイデンティティを決める大きな要因であるような時代に、なぜそうなのか。Aさんは「戦後の物資不足と配給制度を経験し、貧しい家庭で育ったので“小さな恵み”に感謝することを学んだ」また「勤勉、学習の価値、それからお金がなくとも音楽やアートなどから喜びを得られることを母親から学んだ」と語っている。若い頃の環境で身についた倹約の姿勢が今に続いているというのは、他の人にも共通していた。「Waste not, want not.」という諺もあるそうだ。無駄をしなければ、腹が減って困ることもない、という意味だそうだ。

収入の半分しか使わない人も「戦後の困難な時代に特別厳しい母親から倹約する躾を受けた」

という。父親が税務署職員で当時でも車のあるような家で他より困っていたわけではないのに、お小遣いは他の子どもより少なくもらっていた。そういう子ども時代のせいか、氾濫する広告と商品にさらされてもやたらと物欲は刺激されず、つつましやかに暮らすことになれている。ただいつのときも一般化は難しい。去年80歳になった友人は「倹約を躾けられて、万一の困難（イギリス人は“雨の日”という言い方をする）に備えるように心がけていたけど、夫は稼いだお金を、買い物や家族旅行に使いまくった。自分ができなかったこと、もてなかったことを子どもにさせてあげたい、ということだったと思う」と、育った環境への反応も人それぞれだと注意してくれた。確かに、「倹約の癖は時の流れとともに失くした」という年配の人にもたまに出会う。

ある68歳の友人は倹約組だが「80年代はサッチャー首相が自分の力でなんでも獲得しなさいと奨励した。それはちょうどやたらとブランド品がもてはやされるようになったときだった。広告も巧みになった。お金がなくてもクレジット・カードで買い物をし、あれ以後ずっと消費のあり方が変わった」とふりかえる。ミセス・サッチャーは金融制度の規制緩和政策などを進め停滞していた経済の再建に成功したが、公共サービスの劣化や利己的なミー・イズムの促しでよく非難を受ける。この友人はフランスやスコットランドに別宅がありながら、ものを捨てるのを嫌い、倹約しているので40代の友達におかしがられるそうだ。

一方、豊かな時代に育った人にも倹約の態度はなくはない。ネットには不況・物価高の生活サバイバルのためから消費社会反対・環境配慮の目的まで倹約テーマのサイトが多数ある。友人の息子さん（40代、独身）もさすがに倹約家に育ったが、同世代ではやはり特殊なケースだという。ちなみに、昨年の8月にロンドンをはじめ各都市で広く起こった暴動（1万数千人の主として若者が商店街などを放火・破壊しブランド品などの略奪行為に及んだ）の原因に若者の高失業率や閉塞感とともに、消費主義やメディアのもてはやすセレブ文化をあげた政治家もいた。

3 人とのつながり

6人の回答者は「臨時収入があったらなにに使うか」の項目で、旅行など娯楽を一番多くあげてはいるけれど、子どもや兄弟などへの援助と述べた人も2人いた。これは生活の満足度が家族など人との関係に大きく左右されていることともつながっている。もちろん人それぞれではあるのだが、親や子ども、兄弟などと距離的には離れて住むようになっても、一般にその関係の大切さは変わらず、よく連絡をとりあっていると感じることが多い。

女性回答者4人は暮らしの満足度で「ある程度満足している」と答えている理由を、主に人間関係においてなんらかの困難な点があるからとしている。2人は伴侶とのコミュニケーションに悩み、1人（未亡人）は子どもや母親へのケア、もう1人（未婚）は姉や姪への心配がある。ただ、それらの関係がなくなれば満足度はあがるかというと、もちろんそうではないだろう。先の報告書では伴侶がいる人ほど、暮らしの満足度は高くなる傾向にあるという。

また、より広く密接な社会ネットワークを持っている人ほど良いウェルビーイングの感覚を持ちやすく、健康にまで影響するといわれる。回答者5人は仕

事またはボランティア活動をし、社会とのつながりも広い。ミセス・サッチャーが「ソサエティなどというものは存在しない」と言ったことは有名だが、もはやGDPの成長に国民の幸福を託せない時代、同じ保守党のキャメロン首相が「ソサエティは存在する」と言いなおしたことは象徴的だ。ビッグ・ソサエティという言葉を使って新たなコミュニティの再生を行おうとしている。

先の見えない不況にあってチャリティに寄付する人の数が増えたという思いがけない数字もあった。寄付の平均金額は減っているのだが、寄付者数は増えその総額はあまり変わりがないという。冒頭で触れた生活の満足度の数字もそうだが、イギリス人の弾力性を見る思いだ。

草柳武男

1906年（明治39年）生まれ
元洋服仕立職人（神奈川県）